

# 日本人の非日常と日常に棲息する虎たち

―日本十二支考〈寅〉生活文化篇―

濱田 陽・李 珣淑

## 1 虎と日本人

### 日本の虎の由来

新石器時代にあたる縄文時代にはすでに絶えていたため、日本列島では生きた虎を見ることができなかった。

動物学者で博物学者の高島春雄によると、平安時代前期の寛平二（八九〇）年、猫好きの宇多天皇に新羅からはじめて虎の子二匹が献上され、天皇は、この虎を著名な宮廷画家だった巨勢こせの金岡かなおかに写生させたという（高島、一九八四、二二七頁）。『南総里見八犬伝』（一八一四―一八四二刊、全九八巻、一〇六冊）には、金岡の描いた眼無しいぬえしんべえの虎に絵師が眼を描いたところ抜け出して洛中を大暴れしたので、ヒーローの犬江親兵衛が両目を矢で射抜くと絵に戻っていたというエピソードが挿入されている。戯作者曲亭馬琴がこの大作を書いた江戸後期に金岡の虎の絵の伝承はあったが、絵は現存していない。

虎の絵は、室町時代後期からよく描かれるようになった。現存する日本最古の虎の屏風絵は、二十代で

夭折した水墨画家単庵智伝たんあんちでんが一六世紀頃に描いた「竜虎図」である。竜虎や虎に竹の画題は、武家の気風にかない、室町後期には雪村せつそん、桃山時代には長谷川等伯、曾我直庵そがちよくあんらが手がけた。

『長崎略史』によれば、戦国時代、天正二（一五七四）年に明の船が来航して象や虎をもたらし、翌年にも明船が武將の大夫宗麟に虎四匹、象一匹を贈ったという（前尾、二〇〇〇、一五八頁）。また、江戸初期に編纂された初めての諸大名家の系図『寛永諸家系図伝』によれば、文祿の役（壬申倭乱）中、文祿二（一五九三）年と三年に生け捕りにされた虎が豊臣秀吉に送られたとされる。秀吉は、虎を天皇や家臣たちに見せ、車に載せて京都の町を廻らせている。さらに、『駿府政事録』では、オランダ人航海士で、東南アジア方面の朱印船貿易で活躍したヤン・ヨーステンが、慶長一九（一六一四）年、徳川家康に虎の子二匹を贈ったという。

このように戦国時代から江戸初期にかけては、限られた権力者が生きた虎を見ることができたが、移送中に偶然目にするのができた庶民の数はわずかであっただろう。

しかし、中国の薬学書の集大成で動植物の記述に優れる李時珍の『本草綱目』（一五九六年刊）が慶長九（一六〇四）年までに日本にもたらされ、その虎の記述が図説百科事典『和漢三才図会』（二七二二年刊）に採用されると、虎に関する知識も増えてゆく。

### 虎と江戸の絵師たち

江戸初期では狩野探幽、中期には伊藤若冲じやくちゆう、円山応挙らの虎図が有名である。比較文学者芳賀徹は、

若沖の虎が朝鮮民画に描かれた虎ときわめてよく似た姿をしていることをいち早く指摘している。華麗で写生的でありながらどこことなく幻想的な独自の画法を草案したことで知られる若沖であるが、本物の虎を見る機会がなかったために、朝鮮民画を通じて朝鮮の虎と民衆の絵心に肉薄しつつ描いたのだろうという（芳賀、一九八八）。そうであれば、虎を通じた日本と朝鮮の思いがけない文化交流であり興味深い。この虎図には「私は物象を描くの真でなければ描かない。国に猛虎なく、毛を做いたしに模写する。」（我描物象 非真不図 国無猛虎 做毛盖模）という言葉が添えられている。

江戸後期には、本物の虎を見ることができないまでも、どのようにこれを描くのかという課題がさらに多様な手法で追求された。長澤蘆雪は気迫のこもった、生きているような虎の絵を描いたが、師の円山応挙と同じく瞳孔が縦に細く表現された眼は、猫の眼を応用したと考えられる。文人画家の桑山玉洲（わかしゅう）は、小さな黒目が表された真ん丸い眼と踏み出した右足の量感が印象的なダイナミックな虎を描いたが、これも実物を見ずに真に迫ろうとする試みであった（府中美術館、二〇〇七、八八―九一頁）。

生きた虎を見る事が適わないなかで、ひたすら本物の虎に迫ろうとしたユニークな画家に、京都で活躍した岸駒（がんこ）がいる（内山、二〇〇八、三四―三五頁、府中美術館、前掲、九一頁）。寛政一〇（一七九八）年、清の商人から虎の頭骨を手に入れ、知人から虎の皮を借り受けて、この上にかぶせてみるとまるで生きているようだった。その表情や形態が、それまでの画家が描く虎と大いに違っていたので、筆を取り、精魂を傾けて精密な写生を行なった。そのスケッチは何枚にも及び、各部分の寸法を計測し、牙と歯の本数や形状まで記述した。さらに四本の虎の足も入手し、関節の構造までも観察し、記録に留めた。こうして、

横幅二メートル二〇センチに及ぶ「猛虎図」を完成させた。体表の模様も本物に近く、体躯の様々な所にある起伏も実際の虎を彷彿とさせる。岸駒の虎は、本物の虎を見ずになんとか真実の虎の姿に接近しようとした日本の画家たちの試みの頂点にあるといえよう。ちなみに岸駒が手に入れた頭骨は男子出産のまじないに貸し出されて行方不明というが、虎の足は伝存している。

他方、富嶽百景で知られる葛飾北斎は、岸駒と対照的な現実離れた「竹林に虎図」（一八三九年）を晩年に描いた。人の顔色をうかがい、体を柱に擦り付けるようにして入ってくる飼猫のような虎で、竹をよけてぐるりと首を廻したその表情もまた人の顔のようである。北斎の虎は、たしかに本物の虎がない日本だからこそ誕生した希有な作品といえよう。（府中美術館、前掲、九六―九七頁）

### 見世物や獲物にされた虎

江戸初期の版本『不可徳物語』（一六四八年刊）に京都四条の鴨川で虎を見世物にしたことが記されている。また、大坂最古の名所記『蘆分船』あしわけぶね（一六七五年刊）にも大坂道頓堀で虎を見世物にした記録があるが、本物が偽物かは定かでない。江戸後期の文政年間（一八一八―一八三〇年）に京都、大坂、江戸の三都を見世物になって廻った虎は、猫を染めた偽物であったという（高島、前掲、二二七頁、前尾、二〇〇〇、一六二―一六三頁）。

本物の虎が一般に知られるようになったのは、江戸末期の文久元（一八六一）年にオランダ船が横浜へもたらした虎が江戸で興行されて以来であろうと考えられる。幕末のイギリス外交官オールコックは、日

本滞在記『大君の都』で、この虎がマレー半島で捕獲され、現地で百ドル程度のものが日本で見世物に売ると三千ドルから四千ドルになったと記している（前尾、前掲、一六四頁―一六五頁）。

日本初の動物園として明治一五（一八八二）年に開園した上野動物園は、当初、猛獣は熊のみで、犬や猫など日本で普通に見かける動物ばかりであったが、一八八七年に虎が入り一躍動物園の花形になった。このように明治以降、日本人が本物の虎を目にする機会は増えたが、それは虎が近代的装備で次々に狩られ、捕獲されていく過程でもあった。『征虎記』（一九一八年）という文献によれば、日本の実業家が大正六（一九一七）年に朝鮮で大規模な虎狩りを行ない、東京の帝国ホテルに二〇〇余名を招いて虎肉の試食会が行なわれたという。そのときの虎料理は「威鏡南道トラ冷肉」であった。日本人は見世物や獲物としての虎を知ることにはあっても、生活と共にある民俗としての虎を経験することはなかった。

太平洋戦争末期の一九四三年、空襲で檻が破壊される怖れから、上野動物園では政府命令によって虎を含む猛獣達が毒殺される悲劇があった。園内には、動物慰霊碑が設けられ、動物達の供養が今日も行なわれている。

## 2 戦いのシンボル

### 聖徳太子、源義経

日本人にとっての虎は、日常が破られる戦いの場面に、象徴として登場してくる。後に摂政となって活

躍した聖徳太子は、信貴山（奈良県）で政敵の物部守屋を討とうと戦勝祈願をしたところ、仏教を守護する武神毘沙門天が虎を連れて現れ、必勝の秘法を授けたという。それは、寅年、寅日、寅の刻であった。その後、聖徳太子がこの神の加護で、敵を亡ぼすことが出来たため、毘沙門天は虎に縁のある神として信仰されることになった。現在、信貴山の朝護孫子寺には、高さ三メートル、全長六メートルの世界一の張子の虎が境内に置かれている。

平安時代には、主に渤海から輸入された虎皮は、四位と五位の武官の武具に用いられていた（ヴェアシアア、二〇〇五、四二頁）。また、鎌倉幕府を開いた將軍、源頼朝の弟で、卓越した軍功で知られる源義経は、陰陽師が所持していた兵法の秘伝書をその娘を通じて盗み出し、とくに『六韜』の「虎の巻」を学んだと『義経記』（成立は室町時代初期）に記されている。そのことから「虎の巻」という言葉が成功のための必読書を示すようになった。義経修行の地として知られる京都の鞍馬寺は毘沙門天を祀り、本殿前に阿吽一對の虎像が置かれ、真偽は定かでないが義経由来の「虎の巻」も伝わっている。江戸時代には、「虎の巻」と書かれた巻物や冊子が多く造られて流布し、大変な人気であった。

### 戦国武将と金鱈

戦国時代、関東の有力武家、小田原北条氏は、うずくまった虎の絵が入った印章を用いていた。また、豊臣秀吉の大坂城では、天守閣の最上階外縁に金に塗られた八頭の巨大な伏虎が描かれていた。

城でさらに興味深いのは、天守閣の頂上に飾られる一對の鱈である。姿が魚で頭が虎の想像上の動物

で、城の守り神として雨を降らし火事ときには水を吹き出して火を消すと考えられた。ちなみに、鯨は、魚と虎の二字を合わせた和製漢字で、『和漢三才図会』では魚虎と表記されている。織田信長の安土城（一五七六年）以降、天守閣の装飾として普及したが、とくに徳川御三家の一つ尾張徳川家の居城であった名古屋城の金鯨が有名である。創建時には、雌雄一対でウロコに貼られた金版には二一五・三キログラムの純金が使われていたといわれ、それぞれ二・五メートルを超える高さで一キロ以上の重量を誇っている。戦前は、雄は内国博覧会、雌は一八七三（明治六）年のウィーン万国博覧会に出品されて人気を博した。一九四五（昭和二〇）年の名古屋大空襲で焼失したが、一九五九（昭和三四）年に再建され、二〇〇五（平成一七）年の愛知万博で展示されるなど、名古屋のシンボルとなっている。

### 白虎隊、千人針

天の方角をつかさどる四神の一つで西方に配置される白虎の名は、日本では若くして自害した武士たちのエピソードに結び付いている。明治の新政府軍と旧幕府軍がぶつかった戊辰戦争で、徳川家に忠誠をつくす会津藩は年齢の高い順に玄武隊、青龍隊、朱雀隊、白虎隊という軍隊組織を編成し、白虎隊には一五歳から一七歳の武士の子弟を配置した。白虎隊の少年達は、市中の火災の様子を見て会津城が落城したと誤認し、隊中二〇名が自刃、一九名が命を落としている。少年兵たちの悲劇は白虎隊の名とともに後世に語り継がれ、今日にいたっている。

また、第二次世界大戦まで日本で盛んに行なわれた千人針は、一片の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ

塗って千個の縫玉をつくり、出征兵士の武運長久を祈ったもので、刺繍に虎のデザインがしばしば用いられた。「虎は千里行つて千里帰る」という諺に兵士が無事に帰ってくるようにとの想いを込めたのである。また、寅年生まれの女性に歳の数だけ縫ってもらうと良いとも言われた。

### タイガーマスク、阪神タイガース

虎と戦いのイメージは、太平洋戦争後にも、大衆文化の中に顔を出している。プロレス漫画『タイガーマスク』（一九六八―一九七一年）は、孤児院で育った少年が動物園の虎の檻の前で喧嘩をしたことをきっかけに悪役プロレスラー養成機関「虎の穴」にスカウトされ、殺人的トレーニングを経て覆面レスラー・タイガーマスクとして孤児院を守るために活躍する物語である。一九六九―一九七一年と一九八一―一九八二年にアニメ化され、二度目のアニメ化時から新日本プロレスでタイガーマスクに扮したプロレスラーが登場し、華麗な空中殺法によって一大ブームを巻き起こした。

また、関西一の人気野球球団、阪神タイガースの存在も欠かすことができない。タイガースの名称は、一九三五（昭和一〇）年に前身の大阪タイガースが誕生するときに、ちょうどメジャー・リーグで米国でワールドシリーズを制したデトロイト・タイガースから取ったのだが、阪神タイガースのおかげで日本人にとって虎がいつそう身近なイメージを獲得したことは間違いない。東京を本拠とする読売ジャイアンツとの試合は日本球界を代表する伝統の一戦であり、勇ましく吠える猛虎が描かれた球団旗を有し、選手たちは、虎の縞模様を模した帽子とユニフォームを着て戦う。熱狂的なファンは虎党と呼ばれる。球団歌に



は「獸王の意気高らかに」の歌詞がおどり、「オウオウオウオウ」の雄叫びも入って、ファンたちは虎と一体化して応援を繰り広げる。ソウル・オリンピックのホドリのような全国の虎マスコットでないにせよ、虎は関西地域においてとくに親しみ深い存在になっているのである。

### 3 日常に溶け込んだ虎

#### 虎の子渡し（龍安寺石庭）

日本人にとって、虎のシンボルは、どちらかと言えば戦いに結びついた非日常の場面に登場することが多かった。本物の虎が日本に棲息していないことが日常との距離感を生んだのかもしれない。プロレスや野球も勝負の世界であり、観客は非日常の高揚感を求めて集ってくる。しかしながら、メタファーや名前としての虎は、意外に豊かに日常生活の竹林にひそんでいる。

世界的に有名な京都・龍安寺（一四五〇年開山）の石庭は、「虎の子渡し」の別名で知られる。江戸時代後期に刊行された庭園ガイドブックの名著『都林泉名勝図会』みやぢりんせんめいしょうずえ（一七九九年）に「真の風流にして他に比類なし、是を世に虎の子渡しと云う」と紹介され、二百年前にはこの名称で親しまれていたことが分かる。「虎の子渡し」は、南宋末に周密が記した史書『癸辛雜識（続集下）』きしんざっしきにみえる説話に由来する。虎が三匹の子を生むと、その中に必ず彪ひょうがいて、他の二匹を食おうとするので、渡河の際に親は彪と二匹だけにしてないように苦勞する。まず彪を背負って対岸に渡し、次にもう一匹を背負って渡した帰りに彪を背負って

戻り、残りの一匹を渡したあとで、また彪を背負って渡るといふ。石庭には草木一本無く、波形を描いた白砂に一五個の自然石が配置され、禅の悟りの境地が表現されている。庭に対座してみれば、大小の石がつくりだす絶妙な間に思わず心を奪われる。実際は先の故事を元に作庭されたわけではないが、砂と苔むした石だけで表現された抽象空間を、昔の日本人が虎の親子の姿にも喩えてきたことが面白い。石は、東から五・二・三・二・三と五つのまとまりをつくっており、それぞれが対岸、親虎、三匹の子虎のように見える。

### 虎になる

さて、日本では、酒を呑んで泥酔した状態になることを俗に「虎になる」といふ。四つん這いになって手がつけられないところから出たとも、あるいは、酒のことを笹ささともいふので、小竹である笹の藪に棲む虎にかけて表現したとも言われるが定かではない。ひどいよっぱらいは「大虎おおとら」といい、大虎という店名の居酒屋が全国各地にある。よっぱらって前後不覚になり暴れ出すのは困ったものだが、庶民の飲酒文化は少々はめを外すことを温かく受け入れている。

### 虎皮のふんどし

言葉の連想によって生み出されたのが、鬼がはく虎皮のふんどしである。鬼は、角を生やした日本の想像上の怪物で、鬼門と呼ばれる東北の丑寅うしとらの方角からやってくる。このため、牛の角を生やし、虎の牙を

もち、虎皮のふんどしをはく姿で図像化された。俵屋宗達の屏風画の傑作「風神雷神図」は、雷神を鬼の姿で描いたものとして、とくに有名である。

そして現代は、鬼のふんどしはパンツへと変化をとげた。一九六一年にNHKの音楽番組『みんなのうた』で『鬼のパンツ』という童謡が紹介され、全国に広まった。イタリアの大衆歌謡『フニクリ・フニクラ』のメロディーで、「鬼のパンツは いいパンツ つよいぞ つよいぞ／トラの毛皮で できている つよいぞ つよいぞ」「一〇年はいても やぶれない つよいぞ つよいぞ」「みんなではこう 鬼のパンツ」とコミカルに元氣よく歌う。こうして、虎模様のパンツをはいた鬼が人々の心象にイメージされるようになった。人気アニメ『うる星やつら』（原作は高橋留美子が一九七八―一九八七年に発表した漫画）のラムちゃんは鬼型の宇宙人という設定であるが、虎模様のビキニとロングブーツをはいた姿で空中を自在に飛びまわる。このヒロインのファッションも、鬼門と丑寅の連想に由来している。

### 虎列刺、虎斑竹、虎ノ門

虎は、文字のかたちで病名、植物名、地名、店名、人名にも入り込んでいる。

病名は感染症の一種コレラの当て字として明治初期から使われた「虎列刺」、植物に高知県津山市の特産で一九二二（大正一三）年に国指定天然記念物となった虎斑竹とらふだけがある。虎の斑模様をもつこの不思議な竹は江戸時代から知られていたが、日本を代表する植物学者、牧野富太郎が一九一六（大正一六）年に命名した。世界中でこの地だけに生え、移植も不可能な希少な竹であるという。

国会議事堂や首相官邸がある永田町と、外務省や財務省などの官公庁が集中する霞ヶ関の南に位置する虎ノ門にもふれておこう。現在、一丁目から五丁目まであり約二千五百人が住んでいる。虎ノ門は、もと江戸城の南端にあった外郭門の名である。その門がなぜ虎ノ門と呼ばれるようになったかについては諸説ある（前尾、前掲、一六九―一七一頁）。①昔この門に虎がつかれた。②江戸城を築いた太田道灌おおたどうかんがこの門から出陣し、千里行くとも無事千里帰ったことを祝って虎ノ門と名づけた。③大手門を朱雀とすればこの門が白虎の方角に当たると。④朝鮮から生け捕りの虎を献上した際、檻が大きくて従来の門では通らないので新しく虎の門をつくった。いずれも定説にはなっていない。

## 虎屋

虎の名をもつ店で有名なのは、一六世紀末頃、京都で創業した和菓子店の虎屋である。絶品の羊羹を包み込む包装紙と紙袋は、黒地に躍動する金の虎が描かれた高級な佇まいで、他の和菓子店の追隨を許さない。すでに一六〇〇（慶長五）年の関ヶ原の戦いの記録に「虎屋」の名が出ている。ポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』（一六二二年頃執筆）に「京都には虎の家、亀の家、鶴の家という名前の店が軒を並べている」とあり、江戸時代に虎屋という屋号は珍しいものでなかった。虎屋には、和菓子に関する貴重な古文書や資料を保存する虎屋文庫が設けられている。なぜ、虎屋の名をつけたかは不明だが、十七代目社長の黒川光博は、日本に棲息していなかったとはいえ、昔から虎の勇猛果敢な姿が絵に描かれ詩文でうたわれることも多く、神秘的な力を持つ霊獣とみなされていたので、そうした強さにあ

やかろうとした商家が多かったのではないかと推測している（黒川、二〇〇五、一三六―一三八頁）。皇室御用達の老舗として確固たる地位を築き、明治維新で東京に本社を移した。京都店二階の仏間に虎をともなった武神・毘沙門天を本尊として祀っている。社名にゆかりの深い虎の棲息状況を憂え、阪神タイガースとともに野生の虎の保護活動に協力しているという。

### 『男はつらいよ』の寅さん

最後に、人名を見てみよう。鎌倉時代末から南北朝時代に活躍した臨済僧に虎関師鍊こかんしれんがいる。彼は仏教伝来以来四百余人の僧伝・仏教史『元亨釈書げんかうしゃくしょ』（一二三二年）を記した。戦国時代には、幼名が虎千代で越後の虎とも呼ばれ織田信長と覇権を争った上杉謙信や、巧みに主君を代え最後は徳川家の重臣となつて成功した藤堂高虎など、虎の字を名にもつ武將がいる。近代にも寺田寅彦が物理学者、名随筆家として大正から昭和にかけて活躍し、小説家森鷗外は長男に、ドイツの一般的な人名オットーの音にひっかけて、虎を示す楚国の方言である「於兎おと」の名をつけている。

もっとも有名なのは、国民的映画『男はつらいよ』シリーズ（監督…山田洋次 全四八作、一九六九―一九九五年上映）で俳優渥美清が演じた、おっちょこちょいで心優しい主人公「寅さん」だろう。名を車寅次郎といい、的屋を職業とする架空の人物である。日本各地を旅し、毎作品、故郷の東京葛飾柴又に帰ってきては美しい女性に純情な恋心をいだくが、失恋して去って行く。寅次郎の名は、山田洋次監督が敬愛していた喜劇映画の名手斉藤寅次郎にちなんでおり、虎とそれ以上の関係はない。しかし、映画の大ヒッ

トによってこのキャラクターの名を知らない日本人はいないほどになった。寅さんの衣装は、縞柄でなくベージュ地にチェック柄が入ったジャケットだが、がっしりした四角い顔つきと放浪の生活はどこかで虎を彷彿とさせる。じつは、寅さんは、第二二作『私の寅さん』でこんな口上を披露している。

「新年あけましておめでと〜うございませう。阿蘇山初春興行といたしまして、いかがでございませう。あなたの今年の運勢をいわうこの寅の絵、ね、どうぞ、お近くによって見てやってください。虎は死して皮残す。人は死んで名を残す。」

渥美清は、晩年、肝臓癌が肺に転移するなかで寅次郎を演じつづけ、奇跡的に四八作目の出演をやりとげて一九九六年にひっそりと亡くなった。他人との交わりを避け、公私を峻別して寅さんのイメージを壊さないことに努めた生き様は、群をつくらず誇り高い虎を思わせる名優であった。

外来の動物であった虎は、日本人にとって、本来身近な存在ではなかった。しかし、海外との長い交流を経て、生活の様々な場面に溶け込んでいった。今日、日本人の非日常と日常のいずれにも虎のシンボルは間違いなく定着しているといつていい。それは、韓国や中国の虎文化に比べて間接的で抽象度が高いけれども、個性的な想像力と誇りに満ちているのである。

主要文献

- 高島春雄『動物渡来物語』『全集日本動物誌』第二卷、講談社、一九八四
- 下中邦彦編『平凡社大百科事典』平凡社、一九八五
- 芳賀徹『蕪村の俳諧と若冲の絵画』『與謝蕪村の小さな世界』中公文庫、一九八八
- 西岡弘他監修『成語大辞苑・故事ことわざ名言名句』主婦と生活社、一九九五
- 前尾繁三郎『十二支攷』第二卷寅・卯、思文閣出版、二〇〇〇
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、『日本国語大辞典 第二版⑨』小学館、二〇〇一
- 王敏・梅本重一編『中国シンボル・イメージ図典』東京堂出版、二〇〇三
- 黒川光博『虎屋 和菓子と歩んだ五百年』新潮新書、二〇〇五
- シャルロツテ・フォン・ヴェアシア『水銀と虎の皮―日渤海関係における特産品』『古代日本と渤海 能登からみた東アジア』
- 上田正昭監修、大巧社、二〇〇五
- 伊藤亜人監訳『韓国文化シンボル事典』川上新二編訳、平凡社、二〇〇六
- 府中美術館編『動物絵画の一〇〇年』府中美術館、二〇〇七
- 頼原退蔵『江戸時代語辞典』尾形仿編、角川学芸出版、二〇〇八
- 内山淳一『動物奇想天外―江戸の動物百態』青幻舎、二〇〇八
- 西本豊弘『人と動物の日本史 1 動物の考古学』吉川弘文館、二〇〇八
- 中澤克昭『人と動物の日本史 2 歴史のなかの動物たち』吉川弘文館、二〇〇八
- 菅豊『人と動物の日本史 3 動物と現代社会』吉川弘文館、二〇〇九
- 中村生雄『人と動物の日本史 4 信仰のなかの動物たち』吉川弘文館、二〇〇九

付記

本稿は、財団法人・韓中日比較文化研究所（李御寧理事長 ソウル）の依頼により執筆した原稿を元に再構成したものである。本稿のうち「見世物や獲物にされた虎」「戦国武将と金鯢」「虎になる」、「虎屋」第三・四・五・七・八文、「寅さん」第一段落を除いたものが、『十二支神 虎』（李御寧編 センガゲナム出版、二〇〇九年二月、原題『십이지신 호랑이』이영령 편 생각의나무）に、「日本人の非日常と日常に棲息する虎たち」（原題『일본인의 비일상과 일상에 서식하는 호랑이들』）として掲載された（韓国語版・翻訳 李珣淑）。